

「ヨシ、コラ漬豆の土左衛門出て来い。」

「ヨシヤ、コラ小照……。あたいの好きなお方はあなた一人や云ふときやがつて、漬豆の土左衛門やなんて……。」

「オ、いやゝの、來てるわ。」

「コラ、どうじや。書いたやる。」

「ハア、書いた……書いた……こら斯うや、あるお茶屋で、萬々の都合が有つて幡隨院で書いたんやわ。その替りに字が抜いたアるやらう。」

「コラ字が抜いたあるやなんて……。」

「チョツと喜イさん何を云ふてるのや。ナア。あなたと妾いはなんや。ナア。ナア。」

「フム、ソヤ〜。」

「何を吐かしてくさる。まだ書いて居ようがな。」

「源さん。なんで其様に云ふのや。もう誰にも書いてエへん。これ丈や。」

「啞吐け。まだ清八にも書いて居やうがな。」

「源さん、清八てどんな奴や。」

「千日前で逢ふて、丸萬へ行た事が有るやらう。」

「ハア〜あの背の高い、口の大きい、長清か。彼奴そんな事を云ふてよるのか。厚ケ間敷い。こゝに居やがたらばぼろくそに云ふて遣るのに。」

「こゝに清八が居たら云ふか。ヨシ。長清。出て来い。」

「コラ小照おのれはようも欺しやがつたなア。」

「オ、いや、來てるわ、解つた。あなた三人徒黨してお來なアつたんやな。書いた書いた。なんや清はん。手を振上げて、妾いを叩くてか。叩いて貰ひまへう。妾の身體は頭かみの先から足の先まで證文あかしに書いたあるのやし。親方からお金の掛つたある身體。叩くのんならお金を積んで叩いとくなアレ。チョツと姐やん。店へ行つて常どんに證文持つて來て貰うとくなアレ。皆が集あつて妾いを叩く云ふてはりまんね。サア。お叩き。お金を積んで。さア。叩きなアらんかいな。とてもお金を積んでしよう叩きなアレしまへんやろ。」

「トツトその通りだす。」

「コラ喜イ公。餘計な事を云ふな。誰がどつくと云ふた。」

「そんなら其手をなんで振上げて居なるのや。」

「ウム——こんな山の芋で芋汁かきをしたら美味うまいかと思ふて居るね。」

「とてもお金を積んで叩く甲斐性かひせいがおますまい。大體妾いの商賣しょうばいを何やと思ふてなアるね。娼妓お茶だつ